届かなかった忠告

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
届かなかった忠告

【Ｎコード】
Ｎ５０４０Ｉ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
中国東周時代末期。楚の宰相春申君が自身の食客から忠告を受ける。しかしそれを聞かなかったばかりに。司馬遷の史記にあるお話です。

第一章

届かなかった忠告

中国東周時代も終わりになりその周も滅んでしまう時代のことだ。日本ではこの時代を戦国時代という。中国の南方に楚という国があった。

その楚に一人の男がいた。その名を黄歇という。各地に遊学した為に見聞が広く賢者として知られ秦の強大なることを見抜き楚の為に動いた。

それが為に楚は窮地を脱した。この功績により彼は太子の側近となった。この時も彼は秦の人質になっていた太子を助け彼を楚王にもした。これが楚の考烈王である。黄歇は彼を王にしたことにより遂に楚の宰相となり十二県を与えられた。これが春申君である。

彼は優れた人物であり楚を救っただけでなく太子を王とした。それからも楚ノ勢力を伸張させ国を富ました。宰相にいること長くその権勢は及ぶところはなく食客も三千人を数えた。まさに楚の第一の者であった。

彼が宰相になり二十年余り。楚は豊かであり強勢であった。しかし悩みがなかったわけではない。どのような国にも憂いや悩みは必ずあるものだからだ。

楚の悩みは王に拠るものだった。王は即位して二十年になるが子が生まれなかった。子が生まれないということはそれだけの悩みとなる時代のことだ。しかもそれが王となると余計にだ。宰相である春申君もまたこのことを憂い王の為に美女を探しそのうえで王に献上した。しかし王には相変わらず子は生まれず楚の憂いとなり続けていた。

そんな時のことだ。趙の国に李園という男がいた。邪な男でありかつ野心も抱いていた。彼は楚の話を聞いてふと思いついたのだった。

彼には美しい妹がいた。この妹を王に献上しようというのだ。若し妹が子を産めばそれは楚の次の王となる。そうなれば自身は外戚として栄華を極める。こう読み動こうとした。

しかし彼は邪であってもものが見えていない男ではなかった。王に長い間子供ができないことも知っていた。それが為に彼は一計を案じたのだった。

当然ながら楚のことも知っていた。当然誰が力があるのかも。それで彼はまずは春申君に近付きその食客になることを申し出たのである。

これはすんなりと認められた。当時は力のある者ならば誰でも食客を迎え入れるものだったからだ。春申君もまたその一人だった。むしろ彼はその食客の数を己の誇りとさえしていた。その彼は食客として頼み出て来た李園を迎え入れない筈がなかった。

しかし彼はすぐに暇を貰って故郷に戻った。そうしてそのうえで戻って来るのを遅らせた。そうしてそのうえで春申君の下に戻った。すると春申君はすぐに彼に問うたのだった。

「随分遅かったが何かあったのか」

「実は斉王から使者がありまして」

邪な思いをその柔和な笑みの下に隠して述べた。

「それで遅れました」

「斉と？」

春申君は斉と聞いてすぐにその顔を顰めさせた。斉といえば秦と並ぶ楚の宿敵である。その名を聞いて顔を顰めさせない筈もなかった。

「何故斉王が貴殿に使者を送ったのか」

「妹のことでして」

ここで彼は話を切り出してきた。

「それで使者と会っていました」

「そうか、妹君のことか」

春申君はそう聞いてまずは安心した。また斉が企んでいるかと思

えばそうではなかったからだ。両国は国境を接しており古くから数多くの戦いを経てきた間柄であるからだ。用心に用心を重ねていたのだ。
「それならよいが」
「何しろです」
李園はここでまたあえて言うのだった。
「妹のことが斉まで評判になっておりまして」
「何っ、趙から斉までか」
春申君は何故そこまで評判になるのかすぐに察した。女が評判になるのは何によってか、これもまた昔から答えがはっきりとしているものだった。
「そこまでなのか」
「兄の私が言うのも何ですが」
やはり柔和な笑顔のままである。
「確かに」
「そして妹殿だが」
春申君は知らず知らずのうちに話に乗ってしまっていた。聡明で知られた彼であったが宰相になって長い。歳も経ていた。それが出てしまったのだった。
「結納は終わったのか」
「いえ、まだです」
李園はここでまた仕掛けた。内心ほくそ笑みながら。
「まだです」
「そうか、それならだ」
春申君はまた知らず知らずのうちに乗っていた。

第二章

「妹君に会いたいのだが」
「宰相殿がですね」
「そうだ。一度会いたい」
春申君も男だ。興味がない筈がない。彼はまさに乗ってしまい罠にかかってしまったのだった。自分では気付かないうちにその罠に。
李園は知っていたが言わない。そうしてそのまま。彼に対して答えたのだった。
「それではすぐに」
「よしっ、それではだ」
こうして彼の妹は楚に入り春申君に会った。春申君はその妹の美しさに気を取られすぐに妾の一人とした。程なくして妹は子を孕んだのだった。
李園はそれを見てまた邪な笑みを浮かべそのうえで。次の策に動くのだった。
妹に何かを囁いた。するとすぐに妹は春申君の側で囁いたのだった。
「公子」
まずはこう声をかけた。
「貴方様は最早楚王にとって兄弟以上の方ですね」
「その通りだ」
春申君にもその自負はあった。彼が王としただけではない。長きに渡って宰相として仕えてきている。それはまさに水魚の交わりであった。
「私と王はまさに同じ。王あっての私であるし私あっての王だ」
この自負を述べた。それだけのことはあると思いだ。
しかし妹はここでさらに囁いた。その裏にあるものを彼に悟られないようにして。

「貴方様が宰相になり二十年。ですが王にはお子様がおられませんね」
「一応お子はおられるが」
しかし母の生まれがよくなかった。それで後継者とはみなされていないところがあったのである。
「それでもな」
「ではこのままでは王の御兄弟が次の楚王ですね」
「そうだ」
彼女の言葉に頷くその声が微かに曇った。
「そのように今話されてもいる。誰がよいかな」
「それではです」
女はここで。さらに囁くのだった。
「若しその御兄弟のどなたかが王になればです」
「どうなるというのだ？」
「それは貴方様にとってよいことではないのではないのですか？」
「それはまたどうしてだ？」
「貴方様は長い間王の下で権勢を持っておられました」
このことを否定する者は誰もいない。春申君が楚において第一の権勢を持っていることは最早楚だけではなく天下の知っていることだった。
「それで王族の方にも礼を失したことはありませんか？」
「それは」
「ない訳ではありませんね」
「言われてみればだ」
彼が最も自覚していることだった。認めない訳がなかった。
「その都度王のとりなしで何事もなく済ませてもらえたが」
「では御兄弟が王になられればです」
「これまでのようにはいかぬな」
「そして恨みを持たれている方が必ず害を為さんとするでしょう」
こうも囁くのであった。

「その時にこそ。そうなれば貴方は命を落とされるかも知れません」
「命を失わずともだ」
春申君自身も考えた。考えずにはいられなかった。
「宰相としての私の立場は」
「危ういものになるでしょう。しかし一つそれを免れる方法があります」
「それは一体何だ？」
「私を王に献上し妃の一人として下さい」
ここでこう申し出たのだった。
「そうすれば王は私を必ず寵愛されるでしょう」
「確かにな」
この女の美貌はよくわかっていた。王とてもだった。この言葉もまたよく頷けるものであった。
「その通りだ。そなたならば」
「だからこそです。是非共私を王に献上して下さい。そうすれば私の子が王の子となります」
「私の子がな」
このこともわかっていることであった。
「王になるのだな」
「そうすれば貴方様への禍はなくなります。王の子となるのですから」
「そなたが身ごもってまだ間近い」
春申君はここで言った。
「そしてそれを知っているのはだ」
「貴方と私だけです」
誘惑の言葉だ。しかし彼はこれをこの時は救いの言葉と思ってしまった。破滅の言葉とは知らずにだ。

第三章

「ですから」
「そうだな」
そしてそれを見抜けぬまま頷く春申君だった。
「そなたを王に献上する」
「まことですね」
「まことだ。そしてその子が王となる」
これは最早自然の流れだった。
「そして私の身も守られる」
「その通りです」
女はにこやかに笑っていた。しかしその裏にあるものはこの時の彼には見えていなかった。彼はもう若い頃とは違っていたのだった。
こうして女は王に献上された。王は女を寵愛し程なくして男が生まれた。これにより女は后となった勧めたのはやはり春申君だった。
王が彼の言葉を聞かない筈がなかった。そうして彼の勧め通りそのまま子は太子となった。全ては彼の思うままに見えた。
だがそうではなかった。李園は外戚となり権勢を得た。そうして国政にも携わるようになり怪しい者達を集めるようになっていたのである。
そんな中でのことだった。春申君に対して食客の一人が会いたいと言ってきたのだ。
それは朱英という男だった。彼はまずこう主に告げるのだった。
「この世のことですが」
「この世がどうかされたのか？」
「思いがけぬ幸せが訪れたり思いがけぬ不幸が襲ったりするものですな」
「確かに」
このことは春申君にもわかった。

「この辺りは何時来るかまことにわからないものですな」
「そして今は戦乱の世であります」
その激しさは楚にも及んでいる。誰も知らないことではない。
「明日をも知れません」
「それもまたその通りです」
また頷く春申君であった。
「だからこそ世の中は難しいものですな」
「そうした時代にあっては一つ重要なことがあります」
そしてここで朱英の言葉が強いものになった。
「吉凶を左右できる者を側に置くことです」
「吉凶をか」
「そうです。まずはです」
彼はさらに春申君に話してきた。
「思いがけぬ幸せのことですが」
「それは一体何ですかな？」
「貴方様のことですが」
他ならぬ彼のことだと告げるのだった。
「楚の宰相となって二十五年になりますね」
「はい」
もうそれだけの歳月が経ていた。彼が楚を支え秦を防いでいると言ってよかった。
「名目は宰相ですがそれ以上のものがあります」
このことを彼もよく知っているのだった。
「今王は重病にあられます。若し亡くなれば」
「太子が王になられますな」
「その通りです」
朱英はその太子が春申君の子であることは知らない。しかしその母が彼が王に献上し后にも勧めたことも太子にするように王に勧めたことも知っていた。
「そうすれば貴方様はさらに上にあがられます」

まだ上があるというのである。
「そう、幼い王の代わりに国政に当たられるでしょう」
「そうなるのですね」
「これは王になったも同然のこと」
また告げる朱英であった。

第四章

「思いがけぬ幸せとはこのことです」
「それがですか」
「そうです。そしてです」
朱英はここでさらに彼に対して話すのだった。
「今度は思いがけぬ禍のことですが」
「それは何ですかな？」
「李園です」
彼の名前を出すのだった。
「あの男は王后の兄ですが」
「はい」
「貴方様が宰相にあり国政を取り仕切れないのを怨んでいます」
こう述べるのだった。
「そして元より邪な男です。信用できません」
彼自身についても語った。
「機を窺い貴方様を亡き者にしようとしています」
「私を」
「その通りです。既に無頼の輩を何人も雇い入れています」
彼はこのことを既に察しているのだった。
「これが何なのか言うまでもないでしょう」
「まさか」
「まさかではありません」
朱英の言葉は続く。険しさを増しながら。
「王が亡くなればすぐに宮中に入るでしょう」
彼はこのことを確信しているのだった。
「そして無頼の輩を配して貴方様を殺します」
「私を？まさか」
「まさかではありません。思いがけぬ禍とはこのことです」

言葉を強くして主に告げるのだった。
「このことこそがです」
「そうなのですか」
「そしてです」
そして朱英の言葉はこれで終わりではないのだった。
「吉兆を左右できる者ですが」
「それは誰ですかな？」
「私です」
ここで堂々と名乗るのだった。
「それは私のことなのです」
「貴殿がそうだというのですな」
「その通りです。私を楚王の側に置いて下さい」
彼はさらに強い声で春申君に上奏した。
「王が亡くなられれば李園は必ず宮中に押し入ります」
既にそれは読んでいるのだった。
「その時あの男を殺してみせます」
「李園をですか」
「そう、つまり」
そして言うのだった。
「吉凶を左右できる者とはこのことです。どうか」
「いや」
しかしであった。春申君は言うのだった。
「それはありませぬな」
「ないと言われるのですか？」
「私を思ってくれるその気持ちは有り難いが」
まずはそれはいいというのである。
「だが李園は気の弱い男です」
「確かに気は弱いでしょう」
朱英はそれでもあの男の邪なものは見ているのだった。だがそれは今の春申君には見えていなかったのだ。彼にとって不運なことに。

「ですが」
「私は彼を長い間優遇もしてきた」
「恩にも感じているというのですか？」
「その通りです」
（馬鹿な）
朱英はそれを聞いてすぐに心の中で否定した。
（あの男は恩義なぞ感じる男ではない、決して）
邪な者は己しか考えない。当然恩義なぞ感じはしない。それがわかっていたのである。
「そのようなことはしないでしょう。案ずるに及びません」
こう言って彼の言葉を退けたのであった。言葉が退けられた朱英はそれを見てすぐに春申君の前を立ち去った。そうしてすぐに楚を離れたのだった。
このやり取りからすぐに王は死んだ。すると朱英の言葉通りになった。
「春申君の側近達はいないな」
「はい、まだです」
「まだいません」
人相の悪い男達が李園の周りにいた。そうしてすぐに王宮の中に入るのだった。
「誰もいません」
「我等だけです」
「よし」
それを聞いた李園はいよいよその笑みを邪なものにさせた。
「ならばだ。よいな」
「はい、それでは」
「今すぐに」
こうしてそれぞれ宮中の王の遺体が置かれている部屋の中に隠れた。部屋の隅に隠れる者もいればカーテンの陰に隠れる者もいる。そうして春申君を待った。

程なくして王の死を聞いて彼が駆け込んできた。宰相として当然のことだった。

しかし彼は一人だった。周りには誰もいなかった。そうして刺客達がいるその部屋に入り。

忽ちのうちに刺客達が殺到し彼を貫いていった。彼は叫び声をあげる間もなく全身から血を流しそのうえで倒れていく。その時目に見えたものは何だったのであろうか。

彼はその首を切り落とされその首を門の外に放り出された。李園はそのまま彼の宮殿に攻め込みその一族を皆殺しにした。それで全ては終わりだった。

その後彼の子が王になった。楚の幽王である。これから暫くして楚は秦に滅ぼされ何もかもがなくなってしまった。その滅び方があまりにも悲惨なものであった為に秦への怨みは深いものであり後にあの項羽を生み出すことになるがそれは後のことである。

史記には春申君は老いたとある。その為に李園の邪なことを見抜けずまた朱英の声を聞くことはなかった。そうしてそれにより死んでしまった。司馬遷の最後の文章はあえて簡潔なものにしているようだ。そこにあるのは残念さであろうか。何はともあれ彼はこのようにして死んだ。実に無惨な結末であった。

届かなかった忠告　　完

２００９・６・７

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5040i/

届かなかった忠告

2010年10月8日15時26分発行